

杉本直治郎先生を偲ぶ

伊 東 隆 夫(広島大)

先生のご入院は、昨年9月下旬からであったが、12月にお見舞した時には、一向に病人らしくも見えず、毎日入浴のため、七・八分の距離のお宅に帰られていると承わり、さらに本年7月中旬には、ご本務の広島文教女子大に集中講義に出かけられた由であったので、9月3日夜ご急逝の悲報に接した時には、我が耳を疑った。病院をむしろ、ご研究の仕上げに格好の所とみておられ、しかもご生前とても楽しい日課の一つとされていた入浴中のご急逝と承れば先生ご自身には、正しく大往生であったに違いない。しかし、八十三才のご高齢に拘らず、「まだまだやるべきことが多い」と、お会いするたびに申されていた先生を失なったことは、三十有余年にわたって公私ともにお導きを賜わり、特に東南アジア史への関心へと馭り立てていただいた私にとっては、大きな支柱を失なった一大痛恨事と申す以外に言葉を知らない。のみならず、わが国の東南アジア史学界の大損失と申すべきであろう。ご生前先生から承った数々の逸話が、今更のように私の脳裡に浮んでくる。滋賀師範ご卒業後、暫くの教職にご従事の上、広島高師に入学された頃が、大正の米騒動の時であったので、寮で米を食べない決意をされ、秋の放課後、毎日郊外（今は市内）まで無花果を食べに駈足されたこと、落日に向かって走りながら、地球をボールと考えれば、それこそ宇宙の大遊戯“アース・ボール”だとて、その運動の首唱者となられたこと、桑原隲藏先生との一対一の受講の様、等々……を通じて、一たび“これを”と期せられた先生は、必ずそれに向って邁進されたご逝去に至るまでのあの真摯なお態度が、既に少壮の頃からのことであったことを教えられた。桑原先生譲りの考証的研究の手堅さは、一字一句を忽せにせず、精緻細密、博引傍証余す所がなかった。そのご成果が『阿倍仲麻呂伝研究』（昭15年）『東南アジア史研究-I』（昭31年、『真如親王伝研究』（昭40年）などのうちに公にされたことは、周知の通りであろう。中でも、第三のものは、親王の伝記の記述だけで大冊となり、その終焉地の羅越国問題は割愛せざるを得なかったのは是非『東南アジア史研究』の続篇として、世に問いたいと、常々申されていた。尤も、極めて最近、女婿の宮川満氏に、従来の研究法を少しく改めねばとお洩らしになったとか、ご葬儀当日うかがったが、或は、ご急逝の当日まで病院でお書きになっておられたご遺稿のうちに見出されるのではないかと、ひそかに期待申しあげている。しかし、“慈光院興学直道居士”とな

られた先生から、直接それをお聞きするすべもないのは、何としても残念である。今はただ先生のご冥福を祈るとともに、微力ながら、先生の残されたお教えを体して研究に専念したいとわが身に言いかけつつ、ささやかな追悼文としたい。 (48. 9. 14)

杉本直治郎先生と私

高橋 保 (アジア経済研究所)

恩師杉本直治郎先生が京都の御自宅で急逝されたとの知らせを受けたのは、本年9月4日の午後2時頃だったでしょうか。お亡くなりになったのは前日3日の午後8時、死因は狭心症とのことでした。享年83才。とり敢えず翌5日に京都岡崎公園近くの専念寺で行なわれた葬儀にはなんとか参列することが出来、また葬儀の後では短時間ながら先生の教えをうけた同門の先輩たちと一緒に先生を偲ぶ一ときをもつことが出来ました。

早いもので、今はもうそれから一ヶ月近く経ちました。しかし、今だに近年多少お体の調子が悪かったとはいえ、根が丈夫であられた先生が、あんなに早く突然お亡くなりになるとはとても信じられない気持で一杯です。

思えば、私は杉本先生には学問上はもちろんのこと、社会生活上の事についても、まことに多くを教えて戴きました。私は先生の広島大学教授在任時代の最も末期の弟子に当りますが、学部学生時代に先生のお教えを戴いてから次第に東南アジア史研究に興味をもち、爾来先生の御指導をうけながら今日に至りました。先生が広島大学御退官後もしばらく広島に在住されており、住いも近接していましたので、私は大学院時代5年間を通じて親しく先生の御指導をうけることが出来ました。その間、先生は私の幼稚でまとまりのない質問にもここに笑顔をみせながらお聞きになり、懇切丁寧に御答え下さり、御所蔵の貴重な関係文献を気軽にお貸し下さったりしました。御発表になる論文の構想を解説して下さったり、出版社から送って来たグラを示して、校正の仕方などもいちいち細かく御教示下さいました。こうした先生の御指導のお蔭で、私はどうやら東南アジア史研究法の基礎を一通り学ぶことが出来たような次第でした。

私が大学院を修了して就職のため東京に移り、先生もその後お住いを京都にお移しになられ大学院時代ほどにお眼にかかる機会もなくなりましたが、時折拙い論文の抜刷などをお送りすると、折返して丁寧な御礼と御教示の御手紙を戴きました。「京都に出向く機会があれば、